明治学院大学
ボランティアセンター

創立：1863年
学生数12,598名（大学院含む・2017年5月1日現在）
白金キャンパス・横浜キャンパス

東京都港区白金台1-2-37　明治学院大学白金キャンパス10号館1階
TEL: 03-5421-5131
volunteer@mail.meijigakuin.ac.jp
https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/

設立のあゆみ

1995.01	阪神・淡路大震災発生時、延べ350名の学生が支援活動に参加
1997	支援活動に関わった教職員、学生達の声から、ボランティアセンター準備委員会発足
1998	横浜キャンパスにボランティアセンター開設
2001	白金キャンパスにボランティアセンター開設
2003	文部科学省「特色ある教育支援プログラム」に選定
2007	明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ賞開始
2011.04	東日本大震災復興支援「Do for Smile@東日本」プロジェクト開始 1日社会貢献活動「1 Day for Others」開始
2012.03	包括的な連携のもと継続的な復興支援活動を行うべく大槌町と協定を締結
2013.04	150周年を記念し、「日本赤十字社・明治学院大学 共同宣言」を結び連携を開始
2015	「Do for Smile@東日本」プロジェクト大槌町吉里吉里（きりきり）復興支援プログラムのアーカイブ活動の一環として、「吉里吉里カルタ」が文化庁「平成27年度被災地における方言の活性化支援事業」として採択
2016	「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」開始

■ボランティアセンターのミッション

共通教育機関として「他者への貢献」（Do for Others）の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行います。

教育理念“Do for Others”を実践する場

- ボランティア活動と教育との連携を強化します。
- 学生によるボランティア活動の立ち上げなど、学生の自主活動を応援します。
- 社会貢献を目指した地域社会との協働によるボランティアを推進します。
- ボランティアに関する情報をお知らせします。
- 学生メンバーがパートナーです。

ボランティアセンター（白金キャンパス）

■年間活動状況

明学生全体に広くボランティア機会を提供

2017.04	ボランティアセンターオリエンテーション
05	1日社会貢献活動「1 Day for Others」（春・秋開催）
07	夏のボランティアフェア
08	国際機関実務体験プログラム（夏・春開催）
11・12	ボランティアファンド学生チャレンジ賞募集・助成団体決定

「ボランティア実践」と「大学での学び」をつなげる「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」

2017.06	第1回インテグレーション講座（2017 年度生対象。全4回開催）
11	第2回学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会
11・1～3	第2回インテグレーション講座・前後編（2016年度生対象）

学生メンバーが各セクションで深く活動

2017.04	明学レッドクロスが学内献血会で呼びかけ（春・秋実施）
05	東日本大震災復興支援活動「Do for Smile@東日本」プロジェクト（17年度は大槌9回、陸前高田7回、合同スタディツアー1回。のべ110名以上が参加）
07	海外プログラム事業部が地域の小中学生を対象に「貧困」「ジェンダー」を考えるワークショップを開催
10	白金地域活動が白金台児童館「ワンパクまつり」に参加
11	ボランティアセンター活動報告会。横浜地域活動が「とつか宿場まつり」に参加

■明治学院大学 ボランティアセンターとは

明治学院大学創設者 J.C. ヘボンは、無償の医療活動を通して社会貢献活動を行いました。その大いなる志は、”Do for Others”という教育理念として連綿と受け継がれています。

明治学院大学　ボランティアセンター長
心理学部教授　杉山 恵理子氏

STEP1

設立までの経緯

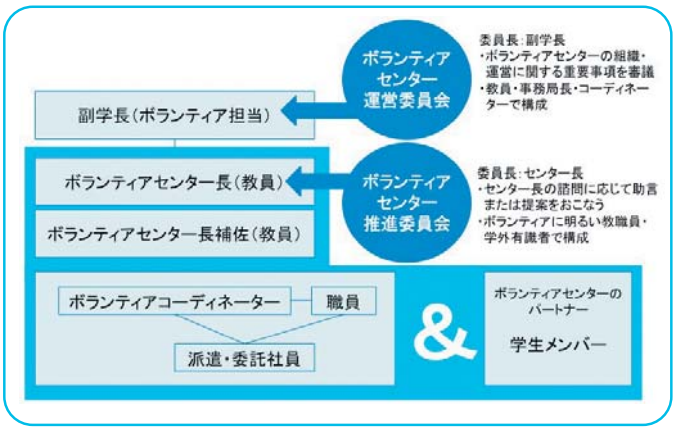
教職員・学生たちから声が挙がり誕生したセンター

明治学院大学は、創設者J.C.ヘボンが生涯貫いた精神“Do for Others（他者への貢献）”を教育理念として掲げ、キリスト教による人格教育を建学の精神として今でも受け継いでいます。“Do for others what you want them to do for you”「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい（『新約聖書』「マタイによる福音書」7章12節）」。この理念の実現のために、各学部、教養教育センターで提供される正課カリキュラムに加え、様々な取組にも力を入れています。

「本学のボランティアセンター設立のきっかけは、1995年の阪神・淡路大震災です。約3ヶ月にわたり、延べ350名の学生が支援活動に自発的に参加しました。個人の判断で関西へ足を運ぶ学生の様子を見ていた当時の森田武明治学院理事長が、センター設立を提言し、支援活動に関わった学生、教職員からも声が挙がりました」とボランティアセンター長の杉山恵理子氏は話します。震災以前も大学の公認を得て活動するボランティア団体は複数存在しており、未公認団体も含めそれぞれの活動方針の下で活動していました。センターを設置することによって、大学の責任の下で上質なボランティアを提供できると考え動きだしました。

「発足にあたり、当時の森田理事長は、明治学院のボランティアセンターは全国の大学のボランティア活動に対する発信基地になってほしいと進むべき方向を示されました。具体的設立にあたっては外部では横浜市社会福祉協議会、戸塚区、内部では宗教部、横浜庶務課、主に社会福祉系の教員の力に頼りながらセンターの母体を創り上げていきました」と杉山氏。1997年、ボランティアセンター準備委員会が発足、当時は学院長招集で中高校長もメンバーに含まれていました。同年にボランティアセンター準備室を開設。準備室は横浜キャンパスの宗教部の一角に設けられ、当時「戸塚まつり」という地域連携型の大学祭を立ち上げようとしていた学生とともに、大学内では横浜庶務課長、地域では戸塚区役所の指導の下で活動をスタートしました。「当初より学生が参加し、設立当時は学生スタッフ、現在では学生メンバーと呼んでいますが、センターとしての活動に学生のアイデアも生かしつつ、創り上げていこうという姿勢は現在でも変わっていません」と杉山氏は話します。

毎年の活動状況をまとめた報告書。充実したボランティア活動の記録が100Pに渡って網羅されています。



1998年春の理事会でボランティアセンターの設置が承認され、11月にボランティアセンターを開設。準備委員会発足から開設まで約1年がかかりました。「苦労した点はマンパワー不足と資金不足。当初は横浜キャンパスでセンター長とボランティアコーディネーター1名体制ではじまり、大学内外との交渉から消耗品の請求まですべて一人で行っていました」と杉山氏。

「予算の無い状況の中で横浜庶務課長の判断で机一つに電話一台を確保し、事務室に持ち込んでいました。ボランティアセンターという組織が社会的に認知されていない中で、本学でもあまり協力的ではないという状況がありました。これからボランティアセンターを設立しようとする大学にとっては、ボランティアに関する認知度は格段に上がっているので、学内コンセンサスは比較的得やすいと思います。その大学にあったセンター運営を目指すことがスタートしやすい条件だと考えます」と杉山氏は話します。

明治学院大学ボランティアセンター
ボランティアセンター長 杉山 恵理子氏（右）
次長 波多野 洋行氏（中央）
ボランティアコーディネーター 中原 美香氏（左）

ボランティアセンターは、1998年の横浜キャンパスに次いで2001年に白金キャンパスに開設されています。

STEP2

設立当初の活動

一番初めに行ったことは横浜キャンパス近隣地域のボランティアニーズの調査です。当時、近隣地域に関わる学生たちの活動も含め調査を行いました。次に、集めたボランティア情報の掲示とファイル整備を行いました。社会福祉実習のレポート（初代ボランティアセンター長担当科目）からボランティアの実情を分析したり、センターの充実を図るべく各種資料・購入した書籍の整理等も併せて行いました。そうした資料や書籍などにより、少しずつボランティアの実態を学び共有できる場所になっていきました。

STEP3

現在の活動

明治学院大学のボランティアセンターは、共通教育機関として教育理念“Do for Others（他者への貢献）”の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行うことをミッションとしています。

なかでも、学生メンバーは211名（2018年2月現在）が各セクションに所属し、センターとともに「ボランティアの明学」を発信する役割も担っています。白金や横浜キャンパス近隣で地域の方とともに活動する地域活動、東日本大震災復興支援活動を行う「Do for Smile@東日本」プロジェクト、日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップのもと活動する明学レッドクロス、世界の諸問題を学び、解決に向けて行動する海外プログラム事業部など、国内外の様々な地域・機関とネットワークを結びながら、主体的に活動しています。

また、2011年度からは“Do for Others”を実践できる機会として明学生の誰もが参加できる「1 Day for Others」をスタート。学生は地域コミュニティやNPO、企業で1日社会貢献活動に取り組み、その後のボランティア活動へとつなげています。2017年度は、66プログラムに762名の学生が参加しました。

そして、2016年度からは「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」を全学で展開。実際のボランティア経験を大学での専門科目や共通科目と結びつけ、「実践」と「大学の授業」を共に深めていくことを目的とし、教員、ボランティアセンター、更には先輩学生が多面的に支えます。学生一人ひとりがそれぞれの“Do for Others”を具現化し、共生社会の担い手となる力を育むことを目指しています。

取材者の目

Do for Others の教育理念の下 阪神・淡路大震災を機に設立へ

- 当時の学生の支援活動の様子に理事長がセンター設立を提言
- 学生・教職員からも声が挙がり具体化へ
- 全国の大学の発信基地としての方向性

明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム

ボランティアを通じて、“人間力”を高める独自の教育プログラムがスタート

大学の授業とボランティア実践の融合

ボランティア実践と振り返り	まずはボランティアに挑戦！活動後の振り返りで、よりよい成果が生まれます。（計135時間以上の活動）
インテグレーション講座の受講	教員・コーディネーターや先輩学生からのレクチャー・ディスカッションを通じて、「ボランティア実践」と「大学での学び」を結びつけます。
大学の授業	プログラム指定科目として、「明治学院共通科目」と「各学科の指定科目」から16単位以上を修得します。

身につく力
- 他者を理解する力
- 問題発見・解決力
- コミュニケーション力
- 大学・現場で主体的に学ぶ力
- キャリア（生き方）を探求する力

【サティフィケイト（修了証）の取得】

VOLUNTEER PROGRAM

■ボランティアファンド学生チャレンジ賞

特筆すべき独自のプログラムとして「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称“ボラチャレ”）」があげられます。

「本学には『ボランティアファンド』という誰でも気軽にボランティアに参加できる仕組みがあります。大学オフィシャルグッズを購入すると、本体価格の10%（一部5%）がファンドに積み立てられ、ボランティアセンターが運営する学生ボランティアの活動資金となるのです（2016年度の積立額は約78万円）。ボラチャレもこのファンドを原資としており、やる気やアイデアがあっても資金面で活動に踏み切れないグループに奨励金という形で支援しています。長年、活動を続けているグループもあれば、ボラチャレ応募を機に結成するものもあります。応募時は2名でしたが、一年後の現在では20数名の規模に育ったグループもあるんですよ」と次長の波多野洋行氏は話します。

2016年度の募集からは、より多くの明学生にチャレンジしてもらうために、コース新設や応募用紙の見直しなど制度を改定。それにより、芸術とボランティアのコラボレーション、ゼミ活動を発展させた活動、地域を巻き込んだ女性のライフキャリアを考えるイベントなど、実に様々な企画が展開されています。

ボランティアセンターの活動資金として、大学を支える方々からの支援も欠かせません。「大学保証人会（保護者の会）からは被災地支援活動に向かう学生の現地への往復交通費を中心に多大なご支援をいただいています。また、同窓会からは大学祭やイベントでのバザー等の売上全額をご寄付いただいています。」“Do for Others”の精神は明治学院大学を取り巻く多くの方々にも醸成されているのです。

VOLUNTEER COORDINATOR

■コーディネーターの役割

ボランティアコーディネーターは、ボランティア活動について豊富な経験と高度な見識があり、その専門性から学生への適切な助言や、ときには指導が求められます。「学生メンバーと一緒にセクションの企画をしたり、アドバイスをしたりしています。また、外部からボランティアの依頼があったときには、学生への橋渡しも行います」とボランティアコーディネーターの中原美香氏。外部からのボランティア依頼は、団体登録・ボランティア内容のチェックを経たうえでチラシ配架の形で学生に紹介しています。一方で、「こんなボランティア活動がしたい」「活動先でこんなことで困っている」という学生からの相談にも丁寧に応じています。学生メンバーだけでなく、ふらりと訪ねてくる学生にも相談しやすい環境づくりを心がけています。「コーディネーターには、学生のボランティア活動の質を確保・向上させる責任があると考えています。社会性があって、学びや気づきにつながるプログラムを学生に提供したいです」と中原氏は話します。

事前学習・事後学習の重要性

「たとえば被災地に行く際には必ず事前学習を実施します。震災のこと、現在の状況、地域のこと、キーパーソンのこと。現状把握はボランティアを行うためには重要です。活動中も毎晩のミーティングでその日の活動内容と反省点、良かった点などを共有し翌日の活動に反映。終了後も振り返りミーティングや報告書を通じて総括し、次回の活動に備えます」

「中原さんはボランティアセンターにとって7人目のコーディネーターです。これまで本学で勤務してきたコーディネーターの皆さんの多くが、他大でボランティアセンターを立ち上げたり、教鞭をとったりしておいでです。この意味においても、明学ボランティアセンターは設立時に掲げた目標のとおり『全国の大学の発信基地』となりえているのではないかと自負しています」と杉山センター長は語ります。

REPORT

■活動紹介（学生セクションの活動）

明学レッドクロス

赤十字・明治学院共に創設150周年を迎えた2013年に「日本赤十字社・明治学院大学 共同宣言－ボランティア・パートナーシップ・ビヨンド150－」というパートナーシップを結びました。「明学レッドクロス」は日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップとして、同世代へのボランティア参加を呼びかけ、その精神を未来につなぎ、広げていくことを目的に結成されました。活動の一つである「学生に向けた献血呼びかけ活動」では、献血者数の増加につなげようとリーフレットを作成し、学生が訪れやすい都内の献血ルームを紹介。ただ紹介するだけではなく「ここではアイスが食べられるよ」「ここには書籍が豊富」といった付随情報も掲載。このほか、海外赤十字訪問・交流、赤十字ボランティア情報誌「RCV」の取材・編集、「全国赤十字大会」ボランティア等内容の濃い活動を行っています。

都内の献血ルームについて、それぞれが調べた内容を持ち寄りミーティング。

MGパール

マレーシアのボルネオ島の淡水パールでアクセサリーを手作り・販売し、その売上金を寄付することで、現地の森林保全・動物保護につながる活動をしています。販売は大学生協やバザー、フリーマーケットなど様々。併せて環境問題の啓発活動にも力を入れています。二つとして同じデザインがないのが特徴。

現在20名以上の学生が活動していますが、悩みの種は、大きな場所での販売は出店料がかかってしまうこと。たくさんの人に注目してほしい活動です。

アクセサリーは昼休みなどに集まって制作します。

販売するだけではなくボルネオ島の理解への働きかけも。

地域の造形作家にご教授いただき素晴らしい作品へ。

完成したものは商品として販売。

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

■学生ボランティアの意義とは

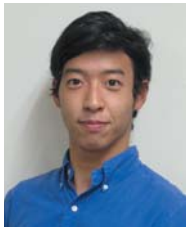
ボランティアは私の世界を大きく広げています

たくさんの人と出会い多様な意見や思いを聞く中で、学生という立場での活動の限界に悩むのではなく、学生だからこそ出来ることは何かを考えるようになりました。今後も出会いを大切に、そしてそこから生まれたつながりに感謝を忘れずに活動を続けていきたいです。

法学部2年
「Do for Smile@東日本」プロジェクト
明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラムチーフ
寺西 なつみさん

ボランティアは周囲だけでなく自分も笑顔にさせる

ボランティアで思うことは、人を笑顔にさせるつもりが、こちらまで笑顔になるということ。少しでも人を笑顔にできるよう、活動しています。ボランティアをすることで、社会問題を他人事から自分事へと捉えるようになり、授業を受けているだけでは出会うことのできない交流につながると感じています。



社会学部3年
学生事務局長
白金地域活動チーフ
飯田 大誠さん

「他者への貢献」が自らを育てる

ボランティアセンター長　杉山 恵理子氏

本学の教育理念 “Do for Others”は、“Do for others what you want them to do for you”という聖書のことばからきています。自分がしてほしいと思うことを他者に対して行う。そのためには、自分が何を望み、何を大切にしたいのかが明確でなければなりません。これは、青年期の発達課題そのものと言えます。ボランティア活動は、自らの発達課題に取り組み成長するためのとても良い機会になると言えるでしょう。

明治学院大学ボランティアセンター取材後記

明治学院大学は阪神・淡路大震災を機にセンター設立をスタート。「全国の大学のボランティア活動の発信基地に」という方向性をもっていましたが、当初は、机一つ、電話一台から始まりました。紙面の都合で十分紹介できていませんが、現在、様々なユニークな取組が行われ、多くの大学にとって参考となるボランティアセンターの一つといえます。

ルーテル学院大学 コミュニティ人材養成センター

創立：1909年
学生数412人（大学院 神学校を含む・2017年5月現在）

東京都三鷹市大沢3-10-20　TEL.0422-31-7920
fukushi@luther.ac.jp
http://www.luther.ac.jp/college/included/community/

設立のあゆみ

2009	大学創立100周年を記念し、大学の社会貢献・地域連携活動の拠点となる附属機関としてコミュニティ人材養成センターを設立 「地域福祉ファシリテーター養成講座」第1期スタート 「人に関わる専門職に対する研修」を4講座スタート 三鷹市「地域ケアネットワーク」設立支援
2011	東日本大震災被災地での学生のボランティア活動開始（2013年度まで）
2012	学生向けメールマガジン「こみゅせん通信」配信スタート
2014	総合人間学部人間福祉心理学科1学科5コース制に改組、「食DE絆」スタート
2015	「認サポの会」結成、 「ボランティア実習」を大学の科目として開講
2016	「インターンシップ」を大学の科目として開講 「対人援助の職場におけるリーダーのスキルアップ講座」スタート 学生たちによる熊本地震被災地支援募金活動をサポート
2017	地域福祉ファシリテーター養成講座を大学の科目として開講

■コミュニティ人材養成センターのミッション

社会貢献・地域連携活動の拠点として、コミュニティにおける「人に関わる人材」における養成活動を展開することを目的としています。

［事業内容］

人に関わる専門職に関する研修

地域づくりに関わる活動者の養成

地域の行政、関係機関・団体との連携事業

近隣の関係機関・施設等における学生の実習・体験活動等の調整
学生のインターンシップやボランティア活動への参加支援

コミュニティ人材養成センター

地域福祉ファシリテーター養成講座

■年間活動状況

2017.06	「食DE絆」−学生と一緒にランチタイム−
07	ファシリテーター養成講座、「食DE絆」−学生と一緒にランチタイム−
08	ファシリテーター養成講座修了生の活動「情報の交差点」に学生が参加
09	ファシリテーター養成講座
10	ファシリテーター養成講座、「食DE絆」−学生と一緒にランチタイム− 対人援助の職場におけるリーダーのスキルアップ講座
11	ファシリテーター養成講座、「食DE絆」−学生と一緒にランチタイム− 対人援助の職場におけるリーダーのスキルアップ講座 学園祭でのインターンシップ・ボランティア実習報告 ファシリテーター養成講座、「食DE絆」−学生と一緒にランチタイム−
12	ファシリテーター養成講座、「食DE絆」−学生と一緒にランチタイム− 三鷹市「地域ケアネットワーク合同事業」への学生の参加
2018.01	ファシリテーター養成講座、「食DE絆」−学生と一緒にランチタイム−

■ルーテル学院大学コミュニティ人材養成センターとは

地域と地域をつなぎ、人と人をつないで 地域を組み立てる人材を養成

コミュニティ人材養成センター長
名誉教授
和田 敏明氏

STEP1

設立のねらい

学院創設100周年を契機に 地域社会と関係を深める 関係づくり

「コミュニティ人材養成センター」の設立は、ルーテル学院創設100周年が大きな契機となっています。単なる記念行事を行うのではなく、周辺地域の人材を養成し資質向上に役立つような役割を大学が果たしたいという目的によるものです。

現在、コミュニティ人材養成センター長を務める和田敏明氏は、全国ボランティア活動振興センター所長、全国社会福祉協議会事務局長の経歴を持ち、地域における福祉サービスの推進に強い関心を抱いていました。「和田氏が着任したことで、大学の社会使命とは、地域貢献とは、という100周年記念事業における議論の中で、学内だけでなく学外の人材を育てる仕組みをつくろうという結論に至りました」と、当時学長を務めていた学事顧問の市川一宏氏は話します。

STEP2

学生への総合的支援

教員と学生をつなぐ プラットフォームに

ルーテル学院大学では、実践力を身に付けるために、社会福祉現場などでの実習教育を重視してきました。コミュニティ人材養成センターの設立とともに、地域福祉開発コースや子ども支援コースを含む学部での1学科5コース制の導入を契機に、実習教育に加え、インターンシップやボランティア活動への参加支援の体制も整備しました。コミュニティ人材養成センターでは、実習やインターンシップ先等の紹介にとどまらず、学生の可能性を探りながら相談に乗り、実習中で自信をなくしているときには学生を支えながら、あとあとまで学生をサポートします。こうした学生の実習の支援もコミュニティ人材養成センターの大きな役割となっています。また、コミュニティ人材養成センターでは実習等の担当教員とも学生の情報を常に共有し、実習やインターンシップ、ボランティアなどの活動にとどまらない、学生の進路までを総合的に支援する窓口となっています。「そのためコミュニティ人材養成センターは、学内において学生の状況や課題を最もよく知る部署だといわれています」とセンター長の和田氏は話します。「それぞれの業務ごとに新しい部署をつくって、縦割りにして任せてしまえばいい、というようなことはありません」と市川氏も言います。「こうした複数の業務を柔軟にこなす取組ができるのも、大学の規模が小さいから」と和田氏。「実際に形にするのは簡単ではないですが、学生の顔と名前を教員は把握し、一緒に話し合いながら学生を育てる環境ができています」と市川氏は話します。

STEP3

地域への貢献

自分が住む町を大切に思い 地域に貢献する ファシリテーターを養成

コミュニティ人材養成センターでは、地域からのボランティアの依頼に応え、学生にボランティア情報の提供・サポートも行いますが、より重点を置いているのは、地域づくりに参加して一緒に人材を養成し、活動組織づくりや運営の手伝いをするという点よりは面としての活動です。地域貢献というのは大学にとって大きな課題であり、そのためにルーテル学院大学が開設したのが「地域福祉ファシリテーター養成講座」です。「今は文部科学省も大学の果たす社会貢献の一つとして地域貢献を取り上げているように、地域貢献ということが大学の大きな流れになっています。当時としてはその先駆けの試みでした」と和田氏は話します。

学長を務めていた時にコミュニティ人材養成センターを設立した学事顧問の市川一宏氏（左）と、全国ボランティア活動振興センター所長、全国社会福祉協議会事務局長などを歴任し、社会福祉、ボランティアに関する第一人者の和田敏明氏（右）。

地域福祉ファシリテーター養成講座の特徴は、三鷹市・武蔵野市・小金井市の3市とそれぞれの市の社会福祉協議会、そこにルーテル学院大学が加わった7者による協働で活動していることです。「それぞれの組織の責任者にプログラムを提案して相談し、組織の中でも議論していただきました。必要性を理解いただけたことで組織の垣根を越えて協力いただけることになり、この養成講座は、コミュニティ人材養成センター設立後の早い段階から大きな柱となる活動になりました。」と和田氏は話します。地域福祉ファシリテーター養成講座の参加定員は、1市につき15名。毎年7月に開講し、1月で修了となります。講座は地域福祉ファシリテーターの役割に関する講義のほかに、小グループによるディスカッション、ロールプレイ、実際の現場に出かけて地域の先駆的な取組についてヒアリングを行う調査など、参加型の内容が中心となっています。

講座開講後8年で、3市あわせて284名の地域福祉ファシリテーターが誕生。講座修了生たちによって、現在23件の新たな「地域の支え合い活動」が生まれています。

地域福祉ファシリテーター養成講座の内容

プログラム		
地域の活動と課題を知る	1日目	講義「これからの社会福祉と地域福祉ファシリテーターの役割」 講義と演習「地域で役立つ社会資源を発見する」
	2日目	演習「地域の福祉課題を考えよう」
	3日目	講義と演習「地域でサポートするときの人との関わり方」
	4日目	実践交流 「地域の活動実践交流ー地域で展開されている先駆的な取組と、講座修了生の活動を知ろうー」
	グループ学習	「地域の福祉課題を調査する」
活動を企画する	5日目	福祉課題レポート発表
	6日目	講義と演習「活動の計画をたてる手法を学ぶ」
	7日目	「福祉課題解決に向けた『新たな支え合い』活動を企画する」
	グループ学習	プレゼンテーション「私たちが企画する『新たな支え合い』」活動修了式

立場の違う人たちが出会うことで新しいつながりが生まれる

地域福祉ファシリテーター養成講座をスタートしたことで、コミュニティ人材養成センターが目標とする地域との関係性は非常に強くなっています。2017年8月には、8期修了生の活動「情報の交差点」が企画した「みんなでやろう、遊びとスポーツ」をルーテル学院大学で行いました。地域の小学生が集まり、学生も企画運営に関わりながら参加し、おにごっこやフットサルを楽しみました。ファシリテーター養成講座から生まれた様々な「地域の支え合い活動」に学生が見学に行くなど、支え合い活動から学生が学び、学生が支え合いに関わる場となっています。

ファシリテーター養成講座には、自治会の役員やボランティア活動を行っている人、これからボランティア活動を行ってみようという人など、様々な立場の方が参加していますが、同じ地域に住んでいてもお互い会ったことがない人がほとんど。「そうした人たちがここで出会うことで、考えや立場が違う人たちと一緒にやっていくということを学びます」と和田氏は養成講座によるファシリテーター養成について話します。さらに和田氏は、そうした人たちの本来の活動にも影響すると言い「例えば自治会活動を行っていた人が地域ボランティア活動を行っていた人に出会うことで地域ボランティアに関心を持ち、つながりを生み出していくようなことが起こります」と話します。

地域福祉ファシリテーター養成講座は、7月から翌1月にかけ、隔週で毎回180分行われますが「カリキュラムのグループ学習は、ほかではできない内容です」と和田氏。グループ学習はそれぞれ3～4回行い、関心のあるテーマに沿って地域に実際に行って調査し、まとめて発表するというものになっています。さらに養成講座の後半に行われるグループ学習では、関心の合う者同士がグループを作り、これからどんな活動を行いたいかという、実際の企画を創り出します。和田氏は「他の地域からも、同様な講座を開設してもらえないかという話をいただくのですが、このグループ学習の部分が非常に手がかかるため、お断りをしています」と言います。全く立場も背景も違うと思っていた相手と、同じ机を囲み出会うことで変わっていく。そんな場所をルーテル学院大学では提供しています。

これまでは社会人対象の講座でしたが、2017年からは学生でも4年生であれば参加でき、単位として認められるようになりました。今後は学生にとっても有効な講座となり、学生と地域住民とが共に学ぶ良い機会となることが期待されています。

ファシリテーター養成講座から生まれた「地域の支え合い活動」例

ぬくぬくカフェ鷹野（三鷹市6期）	都営住宅に住む高齢者を対象に、孤立を防ぐ目的で、集会室を利用した交流カフェを実施
ハッピーグランパ倶楽部（三鷹市4期）	シニア男性の地域デビューのサポートを目的に、シニア向け「グランパ養成講座」と、子どもと交流する活動を実施
ケアラーズカフェよりそい（武蔵野市5期）	介護者同士が介護体験を分かち合ったり、介護の知識を学ぶ講座を実施する交流の場を実施
独歩の森を楽しむ会（武蔵野市7期）	緑地を活用して、自然に触れながら世代を超えた交流の場を実施
小金井の縁がわ（森のこみち）（小金井市3期）	自宅を開放して住民同士の交流の場を実施するとともに、市内の居場所マップを作成して配布
みんなdeごはん（小金井市8期）	一緒に食事を作って食べることを通じて、子どもと地域の大人が交流する場を実施

取材者の目

学院創設100周年を機にセンターを設立

- 個々の学生の状況や課題を最もよく知る組織
- 地域の人材養成とともに、学生の学外活動から進路まで総合支援

REPORT

■ 被災地支援活動

味の素スタジアムで炊き出し支援

福島第一原子力発電所の事故による避難者と東日本大震災による被災者約700名が、調布市の味の素スタジアムに避難されていました。ルーテル学院大学復興支援特別チームでは、調布市社会福祉協議会と連絡をとりつつ、炊き出しボランティアを行うことを決め、日本福音ルーテル教会東教区からの呼びかけもあり、学生と教会員が共に参加しました（2011年4月）。

炊き出しの準備は、学生と教会からの4人のボランティアと、学内で行いました。味の素スタジアムでの炊き出しは、チャプレン、本学教員、寮母、本学学生、教会より5人のボランティアが参加し行われました。この炊き出しの提供を通じ、被災者の方々とも話ができ、しばし和んだ時間を共にすることができました。

道路の溝に詰まった瓦礫や泥を撤去。

東松島・石巻でのボランティア活動

活動拠点としてルーテル支援センター「となりびと」に受け入れていただき、仙台でのボランティア活動を実施しました（2011年6月～8月）。

活動は主にグループホームでの砂利ならしのお手伝いや瓦礫の片付けが中心となり、被災された方たちから話を伺う機会もありました。被災の惨状を目の当たりにしたことで、自分たちにできることの小ささを痛感し、1日も早い復興を祈りつつ汗を流しました。

学内での仕込み風景。

NPO法人チャイルド・ファンド・ジャパンとも協力して、被災した方たちの心のケアとも関わっていきました。

被災地でのスタディツアー

ルーテル学院大学とルーテル支援センター「となりびと」とが共同で、春休み、夏休みを利用して、計4回にわたり被災地でのスタディツアーを行いました（2012年3月～2013年）。このスタディツアーでは、学生が被災地の視察や被災者訪問、仮設住宅での夏祭りの運営にボランティアとして関わることなどを通じて被災地の状況を目に焼き付けることで、そこから震災の教訓を学び、いま自分たちに何ができるのかを見出しながら、被災地を学び考えました。

熊本地震の支援活動

学生有志による支援団体を立ち上げ、被災された現地の方々への支援を目的とした募金活動を、大学及び街頭（武蔵境駅・吉祥寺駅）で実施しました（2016年4月）。また、神学生たちは現地でのボランティア活動をしてきました。

REPORT

■活動紹介

ファシリテーター養成講座から生まれた「食DE絆」

地域福祉ファシリテーター養成講座の2013年度修了生と学生が協働で開催する「食DE絆」は、地域の方と学生が学食で昼食をとりながら交流する、孤立を防ぎ支え合う地域作りを目指した地域交流サロンです。

参加者の多くは高齢者なので、学生は可愛い孫のようなもの。この他、多くの世代の方が楽しみに足を運んでくれます。2014年から毎月第3水曜日に開催され、食事はワインコイン（500円以内）。2時間の交流はいつも賑やかな雰囲気です。

学生スタッフは16名で活動し、2016年度にはのべ260名が参加しました。

食堂で学生と一緒にランチタイム

学生グループ「認サポの会」

認知症サポーター養成講座・キッズサポーター養成講座を開催

小学生を対象としたキッズサポーター講座。

社会福祉実習を終えたルーテル学院大学の学生が中心となり、学生が何を学び何を思っているのか、地域住民の方々が日々どんなことを感じ何を思っているのかを知る交流の場や勉強会として学生グループ「認サポの会」が結成され、2015年から地域住民と学生を対象に「認知症サポーター養成講座」を開催しています。

「認サポの会」では、2015年10月に地域住民を対象に、2016年6月には学内の学生向けに「認知症サポーター養成講座」を実施。「食DE絆」に参加する地域の高齢者の方も参加しました。さらに8月には近隣の学童保育の子供たちを対象に「キッズサポーター養成講座」を実施するなど積極的に活動を行っており、10月の三鷹市主催のシンポジウムにおいて、学生代表がシンポジストとして登壇しました。

学生の地域活動のサポート

社会福祉施設や医療機関での聖歌隊・ハンドベルの派遣奉仕演奏活動など、学生は多くのボランティアや奉仕活動を行っています。コミュニティ人材養成センターの教員やスタッフは、紹介だけでなく、困ったときの相談にのったり、助言をしたりしています。

地域ケアネット合同事業に参加

2017年11月に三鷹市での「誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせる支え合いのしくみ」の事業の一つである地域ケアネットワーク合同事業「語り合おう、つながろう！大学・学生との情報交換会」に近隣他大学の学生とともに参加しました。会議では学生も積極的に話し合いに参加し、有意義なものとなりました。

こみゅせん通信

ボランティア募集情報、福祉分野求人情報等を掲載した学生向けメールマガジン「こみゅせん通信」を発行しています。2016年度は65回発行しました。

この他、授業では2年生を対象に「ボランティア実習」、3年生を対象に「インターンシップ」が開講されています。

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

■学生ボランティアの意義

ファシリテーター養成講座で多様な考えを学ぶ

普段の大学生活では同世代の人間としか関わる機会がないですが、この講座では年代や立場の異なる住民の方々と関わることができ、多様な考え方を学ぶことができました。さらに、立場や考えの異なる方とのコミュニケーションの取り方やプロジェクトのまとめ方など「協働」の方法を学ぶことができました。

人間福祉心理学科
地域福祉開発コース 4年
針谷 広己さん

「食 DE 絆」で学生だからできる関わり方を学ぶ

この場所は自分が暮らすまちにどのような人達がいるのか知ることができ、高齢者だけでなく、若い世代の参加者の方々と会話をする中でコミュニケーション方法を学ぶことができる場だと感じています。サロンを必要として来られる参加者でも専門職でもない、学生だからこそできる関わり方があると感じる事できたことも学びの1つです。

人間福祉心理学科
地域福祉開発コース 3年
小林 聖子さん

地域に育まれて成長した学生が地域に貢献する人材となっていく

ルーテル学院大学　教授
地域福祉開発コース 主任
山口 麻衣氏

コミュニティ人材養成センター開設による実践教育と大学内の地域実践拠点の一体化と、新カリキュラムによる地域実践教育の強化により、シナジー効果が生じています。実習教育、インターンシップ、ボランティア活動、就職支援、卒後教育までワンストップで対応できるのが強みです。

ルーテル学院大学 コミュニティ人材養成センター 取材後記

地域貢献が大学の重要なテーマのひとつとなっている今、ルーテル学院大学は福祉学系という特徴はあるものの、小規模な大学ながらにその専門性と資源を十二分に活かして地域に貢献しています。また、小規模であることが学生と教員の距離を近くし、学生の成長を促すボランティア活動をきめ細かく支援しています。